

# 震災後岩手県大船渡市における 認知症とうつ病に対する巡回型デイケアの効果

学籍番号 09M2424 氏名 三浦 秀幸

## 1. 研究背景・目的

震災後の大船渡市では環境の変化や狭い仮設住宅での生活により活動性が低下し、閉じこもりや認知症、うつ病となる高齢者が増えつつある。大船渡市ではデイケアを行なっている施設は1ヶ所のみであり、サービス資源の慢性的な過疎状態となっている。そこで定期的にセラピストやスタッフを派遣し、地域の集会場等を使用して行なう巡回型デイケアの必要性が考えられた。今回、認知症とうつ病を呈する地域住民を対象に巡回型デイケアを実施し、評価項目の介入前後での比較や参加回数が各評価項目の変化率に与える影響、TUGの変化率とGDS・J-CPAT・ZBIの変化率の関連性の検討を行った。本研究の目的は、巡回型デイケアの効果を検討することで、効果的な巡回型デイケアを立案し、今後に繋げることである。

## 2. 対象と方法

**【巡回型デイケア】**巡回型デイケアはリアリティオリエンテーション、回想療法、軽体操の基本プログラムに、対象者の興味や希望する活動、家族の要望を加味した2時間のプログラムから成る。また、医師や臨床心理士による家族相談会や個別訪問を行い、介護者のフォローも行なった。

**【対象】**岩手県大船渡市末崎地区に住む、認知症かうつ病（合併を含む）を呈する住民6名（女性5名、男性1名、平均年齢 $83.2 \pm 3.4$ 歳）である。生活環境は、仮設住宅（3名）、在宅（2名）、グループホーム（1名）である。全員が独歩可能であり、基本的なADLは自立している。

平成24年7月26日から11月8日までの毎週木曜日10～12時（2時間/回）の15回分を研究期間とし、評価は第1回目と第15回目に実施した。

**【評価項目】**・GDS(Geriatric Depression Scale) ・TUG(Timed Up & Go Test)

・J-CPAT(Japan Care Planning Assessment Tool) ・ZBI(Zarit Caregiver Burden Interview)

**【統計】**SPSS 16.0 J for Windowsを使用した。Shapiro-Wilk検定を行ったのち、①評価項目の介入前後の比較では対応のあるt検定、②各評価項目の変化率と参加回数の関連性の検討や③TUGの変化率とその他の評価の変化率の関連性の検討ではPearsonの積率相関係数を行なった。全ての統計学的検定での有意水準は5%未満とした。

## 3. 結果

①すべての評価項目の介入前後の比較では有意差なし。②各評価項目の変化率と参加回数では有意な相関はなし。③TUGの変化率とその他の評価の変化率では有意な相関はなし。

## 4. 考察とまとめ

本研究では有意差や相関を統計処理上では得る事ができなかったが、対象者が6名と少ない事も統計結果の信頼性に影響していると考えられる。今回の巡回型デイケアでは個別リハは行わずに各対象者に設定した目標を集団活動の中で役割を持つ事や得意な事を活かし達成するようにアプローチを行なった。巡回型デイケアを通し、次のような行動や日常生活への変化を得る事ができた。活動の際に作業を拒んでいた対象者が一緒に作業を行ないながら自信をつけていく事で徐々に進んで作業を行なえるようになり、対象から除外された若年の脱落者に対しては個別に対応し、元職業を活かす事で役割を持ちながらデイサービスの利用開始に繋げる事ができた。香山は家族と情報共有をする中で支援者も家族の状況を知る事になり対象者を受け入れる環境をつくる力となると述べている。今回、認知症の理解ができていない介護者と家庭生活やデイケア中の様子の情報を共有し、正しい知識の提供や対応方法の提案を行ない、関係性の再構築を図った。

今後、スタッフ数や新たな対象者の選出等の課題はあるが、被災地という特殊な生活環境の中で増えつつある認知症やうつ病を対象に症状の改善や維持、集団活動に慣れる場や地域のデイサービスに繋げる役割を持ちながら巡回型デイケアを継続して行なう意義は大きいと考える。

(※本研究は勇美記念財団「在宅医療研究への助成研究」を受けて行なった。)